日田条里上手地区

日田市埋蔵文化財調査報告書第21集

2000

日田市教育委員会

調査地点周辺の航空写真（南から）

序　　文

日田市には貴重な文化財が数多く残されています。また埋蔵文化財の発掘調査も多く吹上遺跡や小迫辻原遺跡などの重要な遺跡が発見され後世に伝えるため大切に保存されています。

本書は、宅地造成に伴い発掘調査された結果をまとめたものです。

遺跡は日田大蔵氏の居城とされる慈眼山の眼下に広がった日田条里推定地の中に位置しています。

今回の調査では、古代の建物跡や土坑などが発見され、土師器、黒色土器や輸入陶磁器などの遺物が出土しました。

本書が、市民をはじめ広く郷土史解明や文化財愛護の啓発・普及活動にご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、調査するにあたってご指導、ご協力いただきました関係各位に対して感謝の意を申し上げます。

平成12年３月31日

日田市教育委員会教育長　加藤　正俊

例　　言

1．本書は、株式会社中野組の住宅建設に伴い、日田市教育委員会が平成９年度に発掘調査を実施した日田条里上手地区の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．調査にあたっては、株式会社中野組や地元の方々のご協力をいただいた。

3．空中写真撮影は株式会社スカイサーベイに委託したもので、遺物写真は文化財写真家長谷川正美氏に撮影いただいた。

4．調査現場での遺構の実測は吉田・永田が行い、遺構の写真および遺物の実測・製図は吉田が行った。

5．出土遺物、図面および写真については、日田市埋蔵文化財センターに保管している。

6．本書を作成するにあたり、村上久和氏（県大分県文化課）には多大なご助言をいただいた。

7．本書の執筆、編集は吉田が行った。

本　文　目　次

Ⅰ　調査の経過 …… 1
（1）調査に至る経緯 …… 1
（2）調査の経過 …… 1
（3）調査組織 …… 1
Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 2
Ⅲ　調査の記録 …… 4
（1）調査の概要 …… 4
（2）遺構と遺物 …… 4
（3）その他の出土遺物 …… 14
Ⅳ　まとめ …… 15

挿　図　目　次

第1図　日田条里上手地区調査位置図（1／5,000）…… 2
第2図　日田条里上手地区周辺の主要遺跡分布図（1／20,000）… 4
第3図　日田条里上手地区遺構配置図（1／300）…… 5
第4図　1号建物跡実測図（1／60）…… 6
第5図　2号建物跡実測図（1／60）…… 7
第6図　2号建物出土遺物実測図（1／3）…… 7
第7図　3号建物跡実測図（1／60）…… 8
第8図　3号建物出土遺物実測図（1／3）…… 8
第9図　4号建物出土遺物実測図（1／3）…… 9
第10図　4号建物跡実測図（1／60）…… 9
第11図　5号建物跡実測図（1／60）…… 9
第12図　6号建物跡実測図（1／60）…… 10
第13図　6号建物出土遺物実測図（1／3）…… 10
第14図　7号建物跡実測図（1／60）…… 11
第15図　7・8号建物出土遺物実測図（1／3）…… 11
第16図　8号建物跡実測図（1／60）…… 12
第17図　9号建物跡実測図（1／60）…… 12
第18図　1号土坑実測図（1／30）…… 13
第19図　2号土坑実測図（1／30）…… 14
第20図　2号土坑出土遺物実測図（1／3）…… 14
第21図　3号土坑実測図（1／30）…… 14
第22図　その他の出土遺物実測図（1／3）…… 15

図　版　目　次

巻頭図版　調査地点周辺の航空写真（南から）
図版1　上）調査地点全景写真
　　下）調査地点周辺の航空写真（北から）
図版2　上）1号掘立柱建物跡
　　中）2号掘立柱建物跡
　　下）2号土坑遺物出土状況
図版3　3・4・6・8号掘立柱建物跡、
　　2号土坑出土遺物
図版4　2号土坑出土遺物、その他の出土遺物

Ⅰ　調査の経過

（１）調査に至る経緯

平成９年２月に株式会社中野組より、日田市大字西有田字上手55番地－２の宅地造成計画に伴って埋蔵文化財の有無について照会がなされた。

この開発予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地である日田条里跡に該当することから、その取り扱いについては開発事業者に理解を求め、その確認のための試掘調査を行うこととなった。

試掘調査は８ケ所のトレンチを設定したのち人力で掘り下げ、遺構確認作業を実施した。調査では土坑及び柱穴が発見されたほか、遺構に伴い土師器、輸入陶磁器などが出土した。記録を行った後、トレンチの埋め戻し作業を行った。

試掘調査の結果、遺構の存在が明らかとなったので、再度、事業者と遺跡の取り扱いについて協議を行い、市教育委員会が事前の発掘調査を行うこととなった。

平成９年９月30日に委託契約を締結した。内容は平成９年度に発掘調査・遺物整理作業を行い、平成10年度は遺物整理作業とし、平成11年度に報告書を刊行する３年契約である。

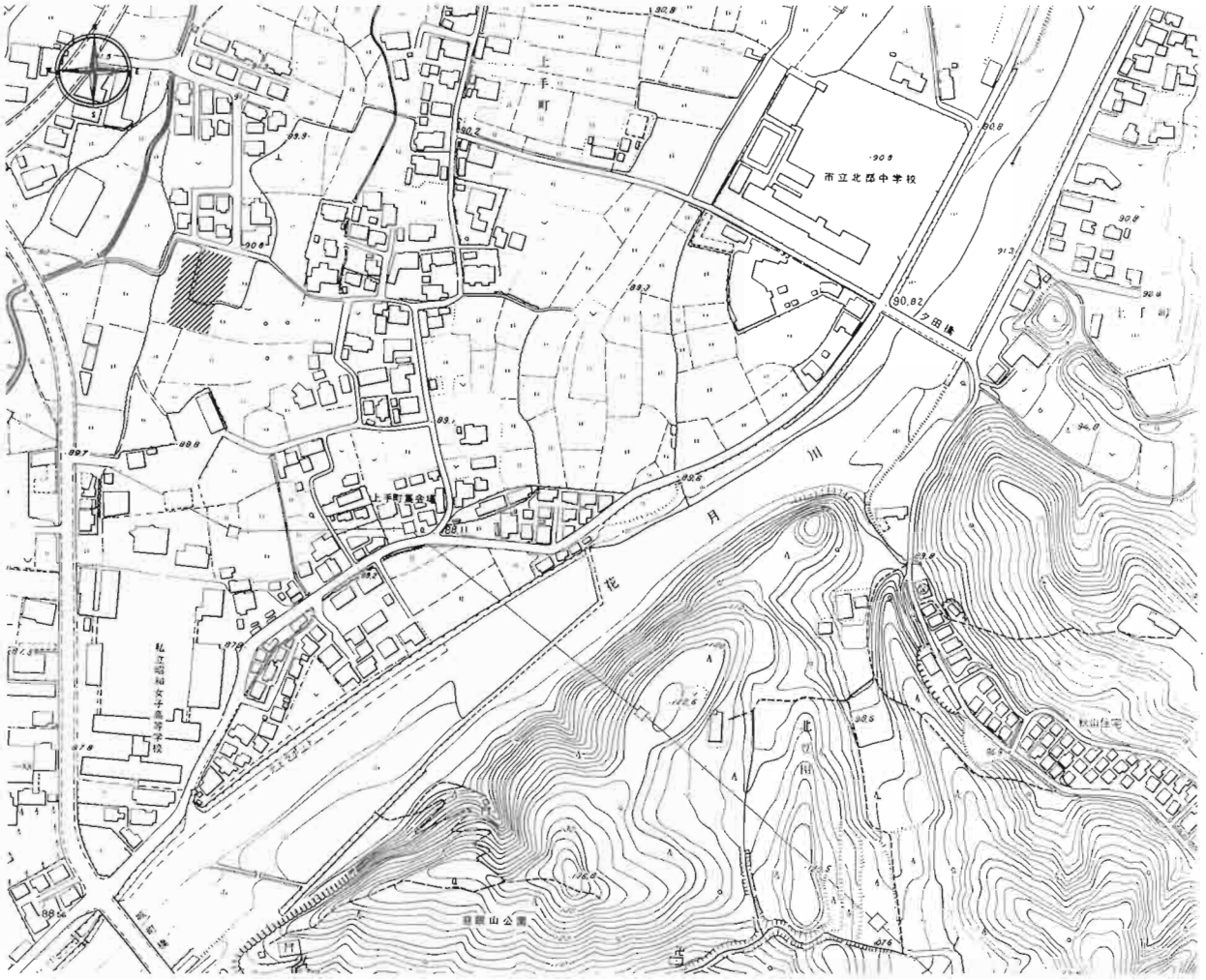
発掘調査の範囲は、造成予定面積2,791㎡のうち1,350㎡を対象として実施した。

（２）調査の経過（平成９年度）

10月６日／バックホーによる表土はぎを開始
10月８日／器材など搬入
10月９日／作業員による遺構検出作業
10月15日／遺構掘り下げ作業にかかる
11月19日／空中写真撮影前の清掃作業
11月20日／空中写真撮影実施
11月30日／調査終了に伴い撤去作業

（３）調査組織（平成９年度～11年度／職名は当時のままとしている）

調査主体　日田市教育委員会
調査責任者　加藤　正俊（日田市教育長）
調査事務　原田　俊隆（文化課長）
長尾　幸夫（文化課長補佐兼文化財係長）～平成11年３月31日
石井　英信（文化課長補佐兼文化財係長）平成11年４月１日～
森山　一宏（文化課主任）～平成10年３月31日
佐々木豊文（文化課主任）平成10年４月１日～
竹原　里香（臨時職員）～平成９年６月30日
美野寿美香（臨時職員）平成11年５月24日～平成12年３月31日
調査員　土居　和幸（文化課主任）試掘調査担当
吉田　博嗣（文化課主事）発掘調査担当
永田　裕久（文化課主事）～平成10年７月31日



第１図　日田条里上手地区調査位置図（1/5,000）

Ⅱ　遺跡の立地と環境

日田市は大分県西部に位置し、市北・西部は福岡県境となる。市の周囲は約1,000m級の山々に囲まれた盆地を形成し、盆地中央部を横切るように東から西に三隈川（福岡県では筑後川）が流れている。三隈川は、北部を流れる花月川や他の支流と盆地の狭くなる西側で合流し、急峻な地形に沿って福岡県杷木・朝倉地域に西走する。

今回調査の行われた日田条里上手地区は、花月川右岸の沖積地に立地している。遺跡周辺は、125～140m前後の台地に囲まれている。これまでの発掘調査の成果をもとに周辺部の遺構の在り方を見ると、その台地上には後迫遺跡、草場遺跡や佐寺原遺跡などの弥生時代中期～古墳時代を中心とした集落や墓地を含む大規模な遺跡が存在するほか、夕田横穴墓、羽野横穴墓群が台地縁辺部を取り巻いている。奈良時代には、この地域一帯に条里地割りがひかれていたと推定されている。また、この時期の調査例では慈眼山瀬戸口遺跡で８世紀中頃から末の井戸や水汲場状遺構が発見され横板井桁組の井戸枠などから公的施設の存在が考えられているほか、後迫遺跡、草場第２遺跡からも掘立柱建物跡が検出されている。中世期になると日田大蔵氏が当地を支配していたが、その拠点となった慈眼山(大蔵古城跡)は調査地点から約400mほど南の位置にある。関連した遺跡として慈眼山瀬戸口遺跡があり、調査では溝・石垣状の石組・井戸・土坑状遺構などが確認されている。大蔵氏については、『宇佐宮御神領大鏡』の記録から11世紀初頭には日田郡の有力な豪族として確固たる地位を築いていたと考えられている。当時を偲ばせる文化財として、慈眼山永興寺には平安末期の作とされる木造毘沙門天立像（国指定重要文化財）などが伝世されている。その後、日田郡は大友氏の支配するところとなり、八奉行による郡老支配体制へと変化していく。

第２図　日田条里上手地区周辺の主要遺跡分布図（1/20,000）

1．日田条里上手地区	2．葛原遺跡	3．縫ヶ迫古墳群	4．三和教田遺跡	5．羽野横穴墓群	6．後迫遺跡
7．草場第１遺跡	8．草場第２遺跡	9．内ノ下遺跡	10．川原田遺跡	11．佐寺原遺跡	12．夕田古墳
13．夕田横穴墓群	14．月隈横穴墓群	15．大蔵古城跡	16．慈眼山瀬戸口遺跡	17．丸山古墳	18．上ノ馬場遺跡
19．中尾原遺跡	20．大波羅遺跡	21．丸尾神社古墳	22．薬師堂山古墳	23．会所宮遺跡	24．元宮遺跡

Ⅲ　調査の記録

（１）調査の概要（第３図）

調査区は花月川右岸の沖積地に位置している。調査では古代の掘立柱建物跡や土坑、溝、溝状遺構などが検出された。掘立柱建物は計９棟に及ぶ。建物の床面積は約20～31㎡で、遺構の分布を概観すると、建物は南側に集中して検出され、北側では柱穴は存在するが明確な建物跡は確認できていない。以下、個別に遺構、遺物の説明を行う。

（２）遺構と遺物

１．掘立柱建物跡

１号建物跡（第４図）

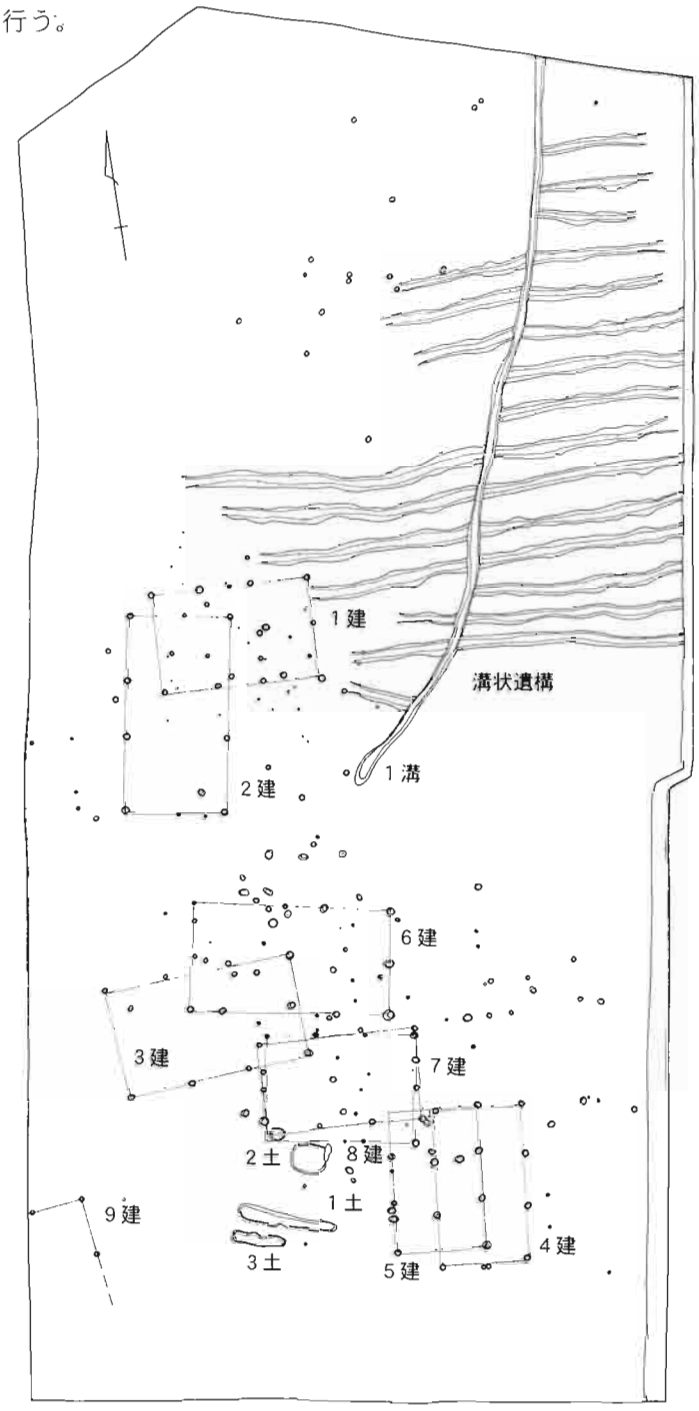
調査区北側の建物群の端で検出された。梁間２間（3.80m）×桁行３間（6.10m）の東西棟で、延床面積は23.2㎡である。主軸方向はN－1°－Eである。柱穴は平面円形で、径20～30cm、深さは約20cmを測る。出土遺物は、土師器が２点出土しているが小破片のため図化できない。うち１点は坏か皿の底部で糸切り痕が残る。

２号建物跡（第５図）

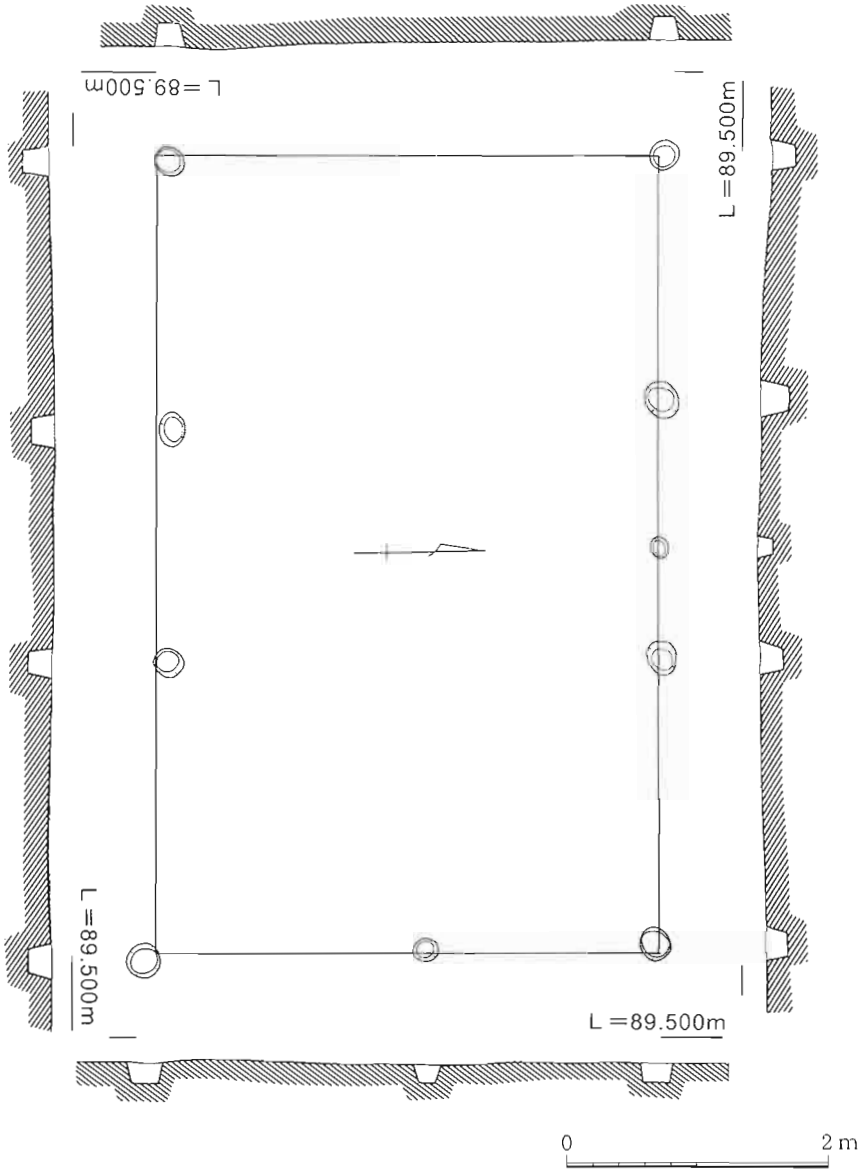
梁間２間（3.90m）×桁行３間（7.52m）の南北棟で、延床面積は29.3㎡である。主軸方向はN－8°－Wである。柱穴は平面円形で、径は平均で約20cm、深さは約20cmを測る。１号建物と切り合っているが先後関係は不明である。

２号建物出土遺物（第６図）

１～３は土師器である。１は小皿で角閃石・石英を含み、淡橙褐色を呈する。２は内黒土器の椀である。内面の調整はヘラミガキである。胎土は角閃石・石英・長石を含む。３は甕の頚部で、くの字形に外反する。内面はヘラ削り。角閃石・石英を含み、茶褐色を呈する。



第３図　日田条里上手地区遺構配置図（1／300）



第４図　１号建物跡実測図（1／60）

３号建物跡（第７図）

梁間２間（4.10m）×桁行３間（7.20m）の東西棟で、延床面積は30.2㎡である。主軸方向はN－6°－Eである。柱穴は平面円形で、径は平均で約20cm、深さは約30cmを測る。

３号建物出土遺物（第８図）

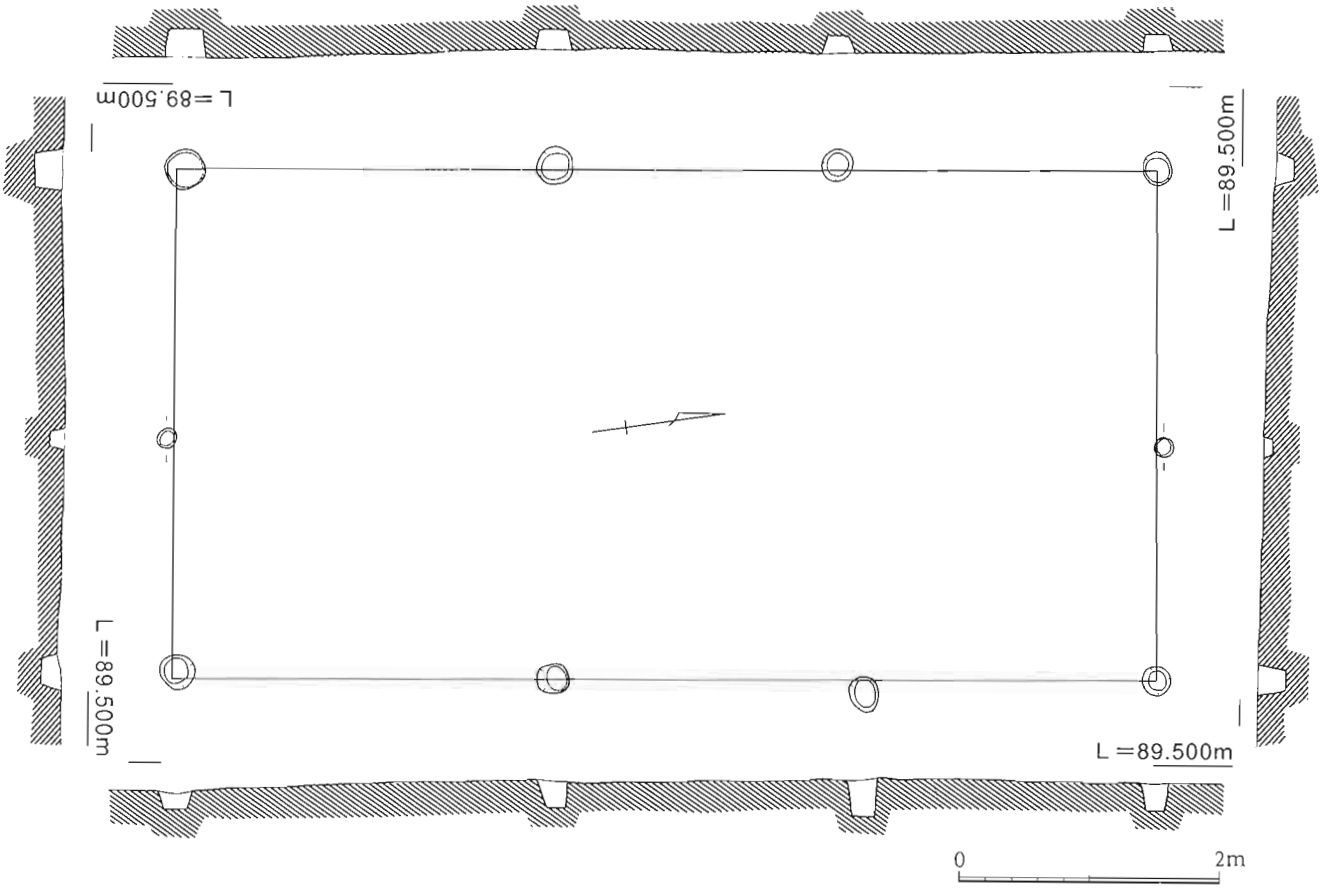
１・４・５は皿、２・６は坏ですべて土師器である。１は口縁端部が外反する。角閃石・石英を含み、淡黄褐色を呈する。２は口縁端部が肥厚する。角閃石・石英・長石を含み、淡橙褐色を呈する。３は土鍋片で角閃石・石英・長石を含み、暗茶褐色を呈する。４は小皿で底部糸切りである。角閃石・石英を含み淡黄褐色を呈する。５は底部糸切りである。外面は回転ナデ調整で、高さは1.3cmを測る。角閃石・石英を含み、淡橙褐色を呈する。６は角閃石・石英を含み、淡黄褐色を呈する。

４号建物跡（第10図）

梁間２間（3.32m）×桁行３間（6.00m）の南北棟で、延床面積は19.9㎡である。主軸方向はN－5°－Wである。柱穴は平面円形で、径は平均で約20cm、深さは約15cmを測る。５号建物と切り合っているが先後関係は不明である。

４号建物出土遺物（第９図）

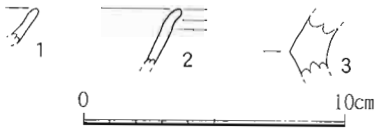
１～５は土師器である。１～３は椀で、１は口径（復元）15.0cm、残存高は3.2cmを測る。口縁端部はやや外反する。外面は回転ナデ調整である。角閃石・石英・長石を含み、淡褐色を呈する。２は口縁端部が外反する。石英・長石を含み、淡橙褐色を呈する。３は椀の高台である。角閃石・石英・長石を含み、淡灰褐色を呈する。４は坏である。角閃石・石英・長石を含み、淡橙褐色を呈する。５は丸底の皿であろう。角閃石・石英・長石を含み、淡橙褐色を呈する。



第５図　２号建物跡実測図（1／60）

５号建物跡（第11図）

梁間２間（3.44m）×桁行３間（5.40m）の南北棟で、延床面積は18.6㎡である。北西側の隅にあたる柱穴は未検出である。主軸方向は４号とほぼ同じで、N－5°－Wである。柱穴は平面円形で、径は平均で約20cm、深さは約15cmを測る。出土遺物は、土師器の小破片が出土しているが図化できない。



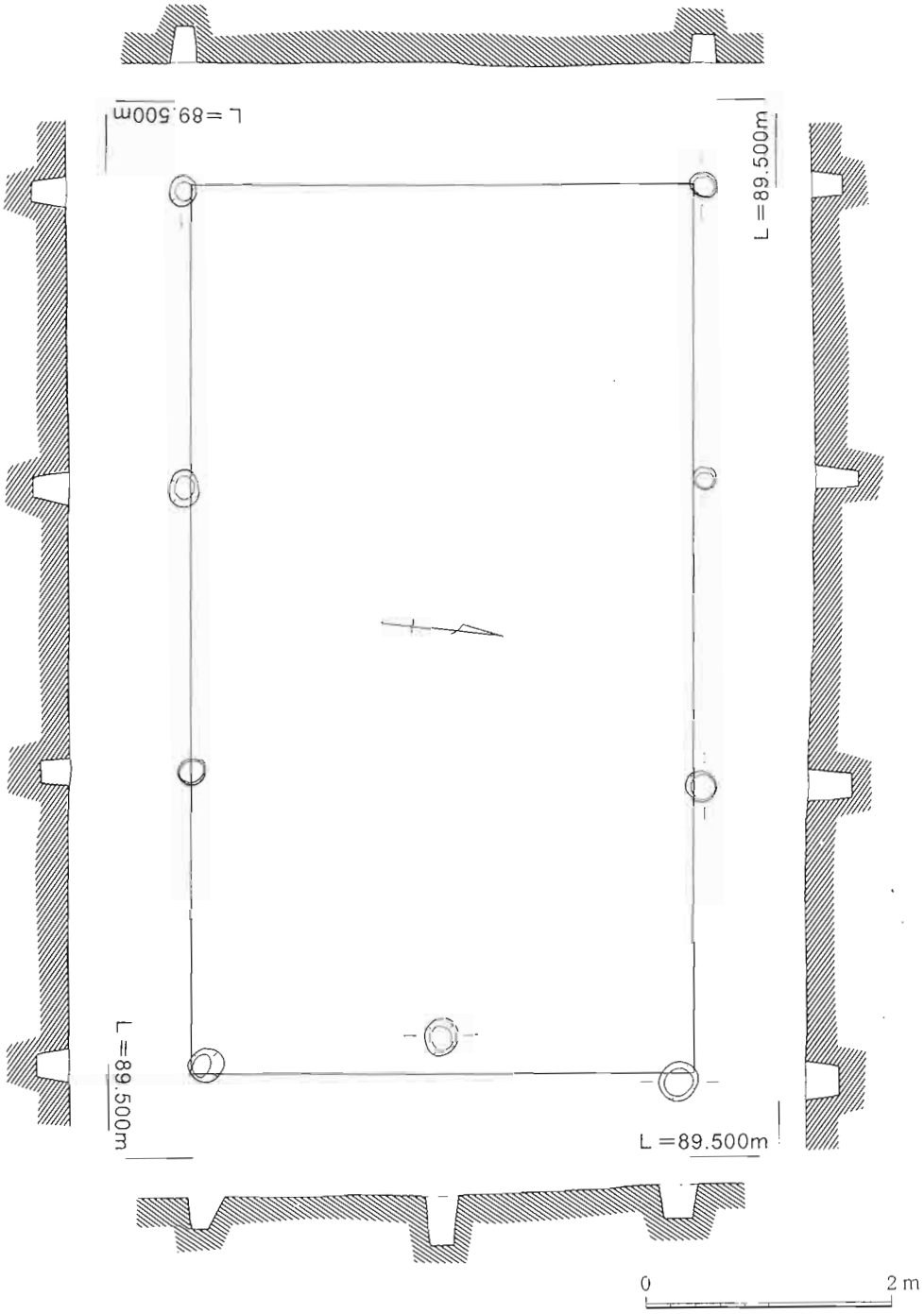
第６図　２号建物出土遺物実測図（1／3）

６号建物跡（第12図）

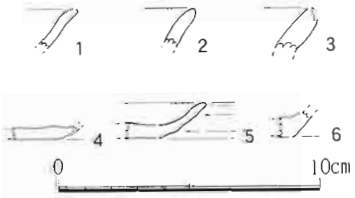
梁間２間（4.10m）×桁行３間（7.60m）の東西棟で、延床面積は31.2㎡と今回検出した建物群のなかでは最大の規模である。主軸方向はN－9°－Wである。柱穴は平面円形で、径は20～35cmとばらつき、深さは10～40cm前後である。３号建物と切り合っているが、出土遺物から判断すると６号建物は、前者に切られていると考えられる。

６号建物出土遺物（第13図）

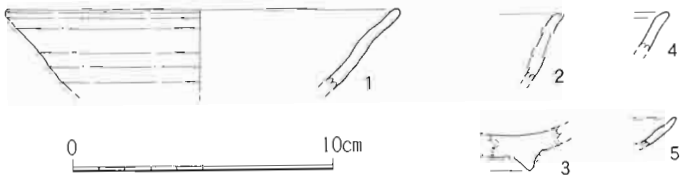
１～５はすべて土師器である。１～３は椀で、１は口径（復元）15.2cm、遺存高3.5cmを測る。外面は回転ナデ調整である。角閃石を含み、淡橙褐色を呈する。２は胴部が口縁に向かって外反し、口縁端部は丸く収める。外面は回転ナデ調整である。角閃石・石英・長石を含み、橙褐色を呈する。３は内黒土器の椀胴部である。外面には指オサエが残る。角閃石・石英・長石を含み、暗灰色を呈する。４は皿である。底部は糸切りで、高さは1.1cmを測る。角閃石・石英を含み、淡橙褐色を呈する。５は土鍋である。頸部はヘラ削り後、指オサエが残る。角閃石・石英・長石を含み、茶褐色を



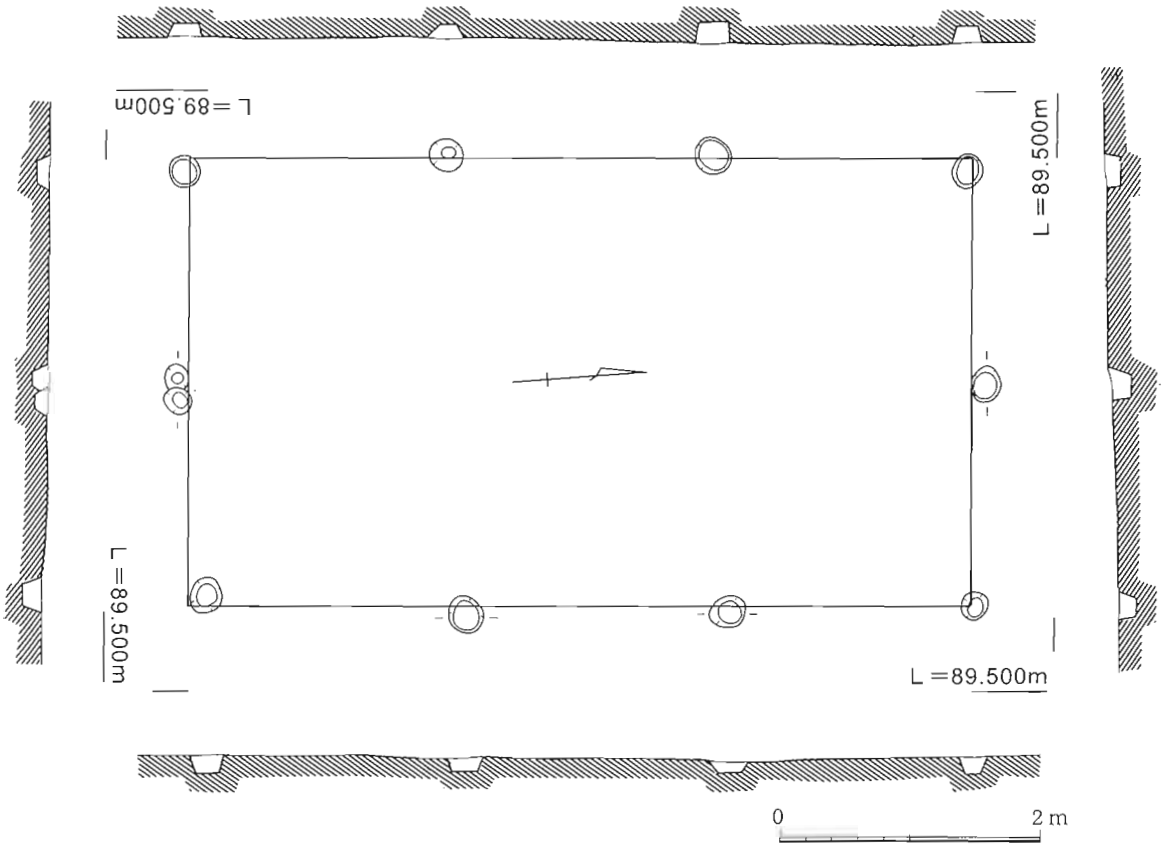
第７図　３号建物跡実測図（1／60）



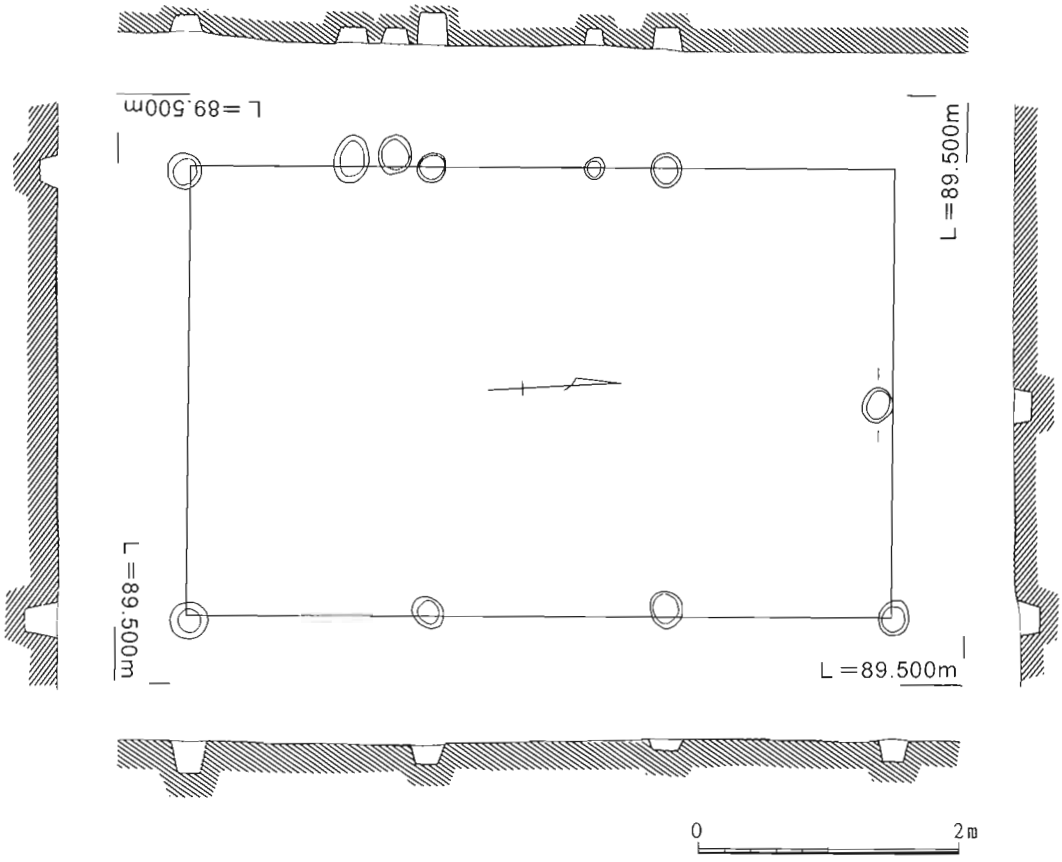
第８図　３号建物出土遺物実測図（1／3）



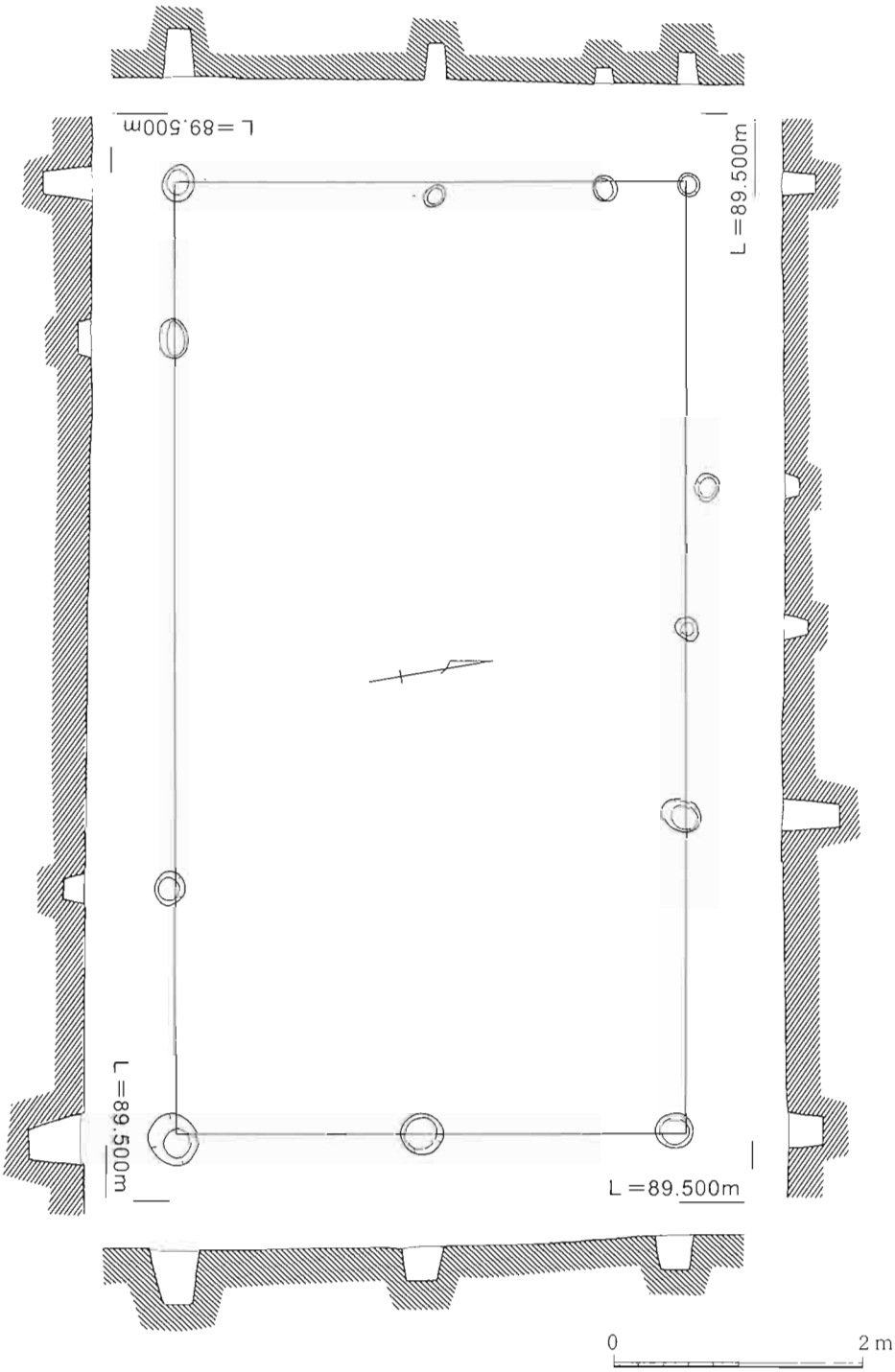
第９図　４号建物出土遺物実測図（1／3）



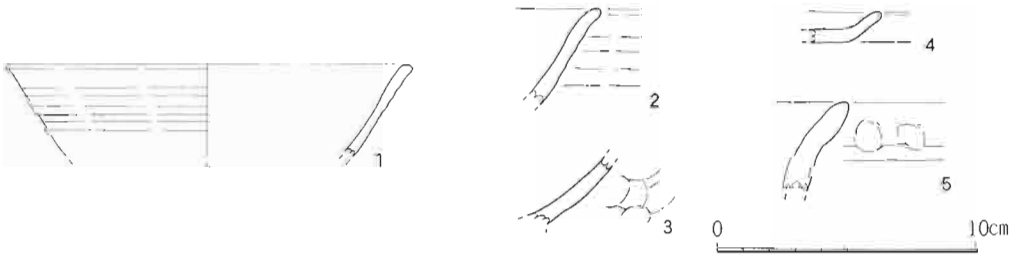
第10図　４号建物跡実測図（1／60）



第11図　５号建物跡実測図（1／60）



第12図　6号建物跡実測図（1／60）

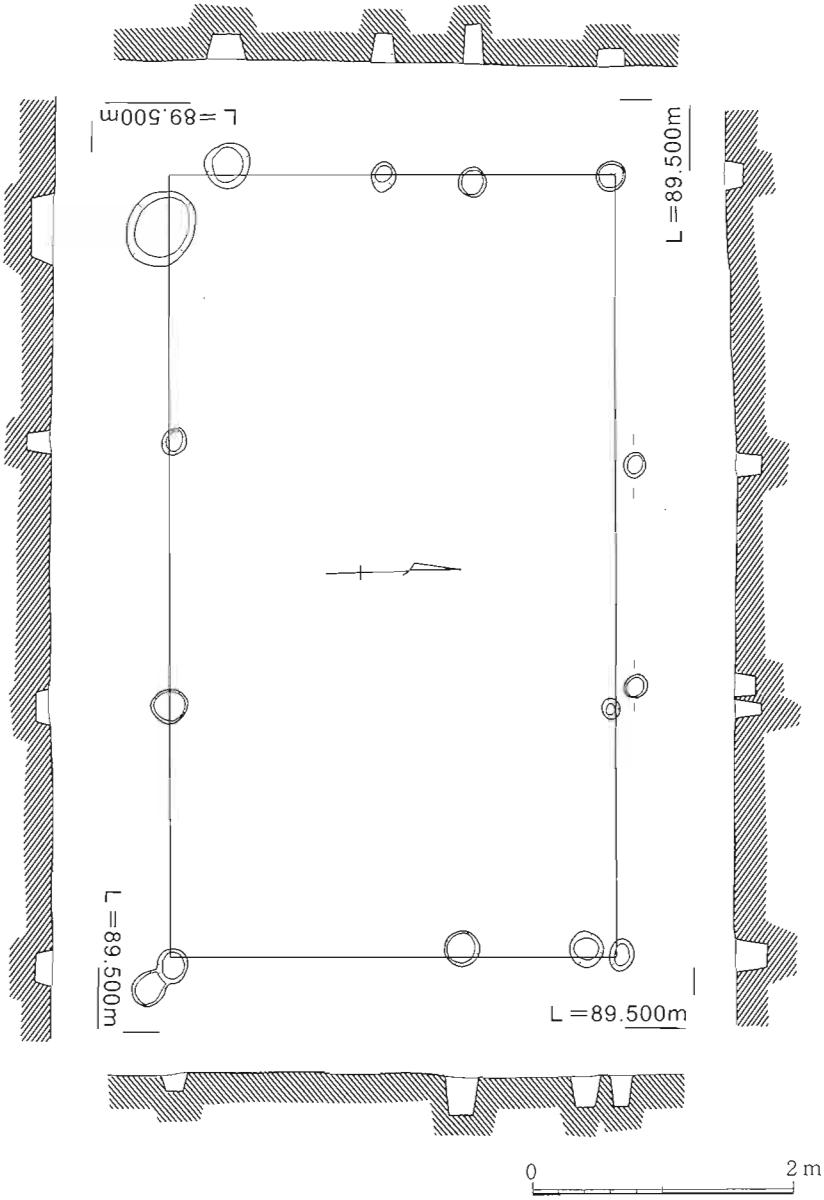


第13図　6号建物出土遺物実測図（1／3）

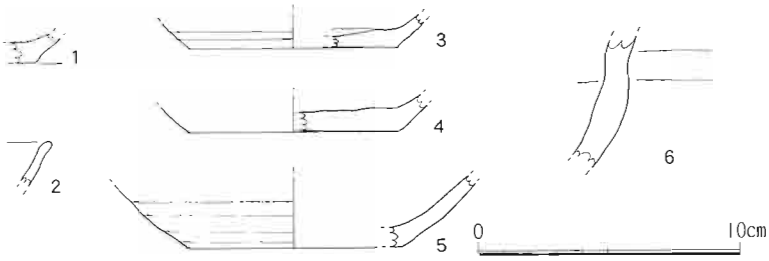
呈する。同じ柱穴内から同一個体の破片が出土しているほか、鉄滓片が１点確認されている。

７号建物跡（第14図）

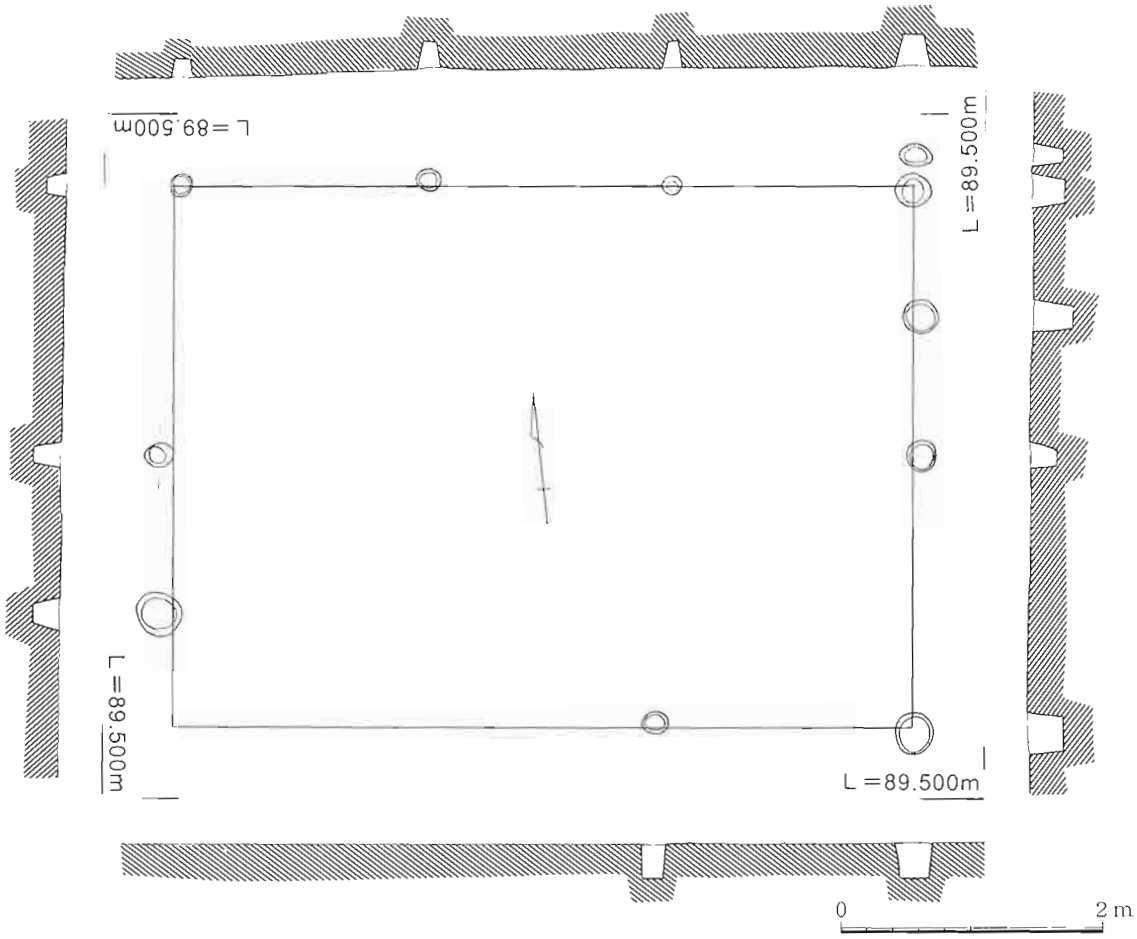
梁間２間（3.40m）×桁行３間（6.00m）の東西棟で、延床面積は20.4㎡である。主軸方向はN－



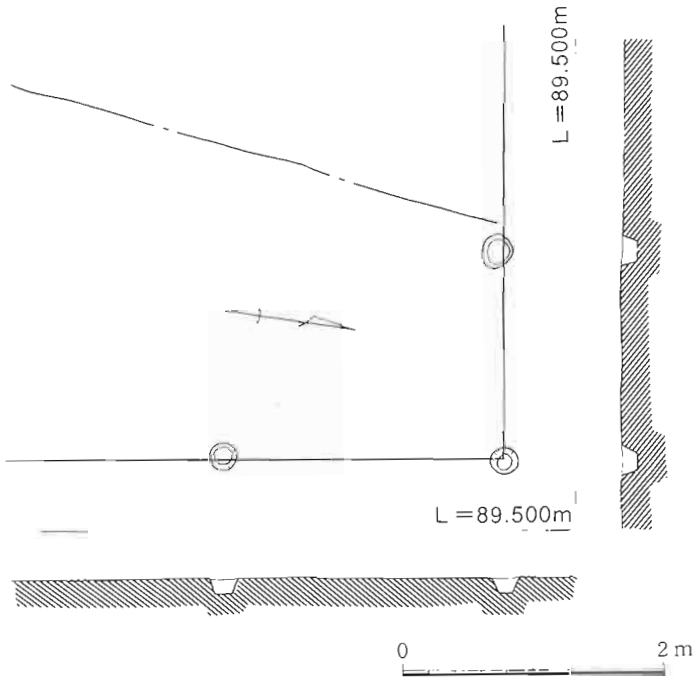
第14図　７号建物跡実測図（1／60）



第15図　７・８号建物出土遺物実測図（1／3）



第16図　８号建物跡実測図（１／60）



第17図　９号建物跡実測図（１／60）

2°－Wである。柱穴は平面円形で、径は20～30cm、深さは約20cmである。３、５、８号建物と切り合っているが先後関係は不明である。

７号建物出土遺物（第15図）

１は土師器の坏で、底部糸切りである。角閃石・石英を含み、淡橙褐色を呈する。

８号建物跡（第16図）

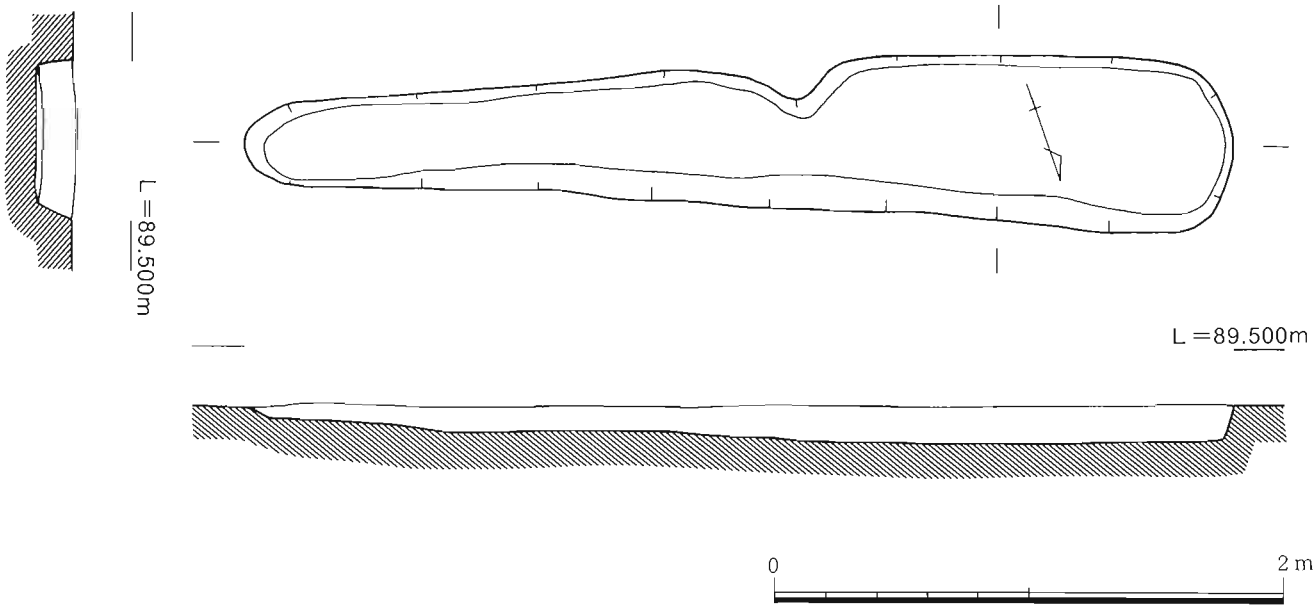
梁間２間（4.14m）×桁行３間（5.64m）の東西棟で、延床面積は23.3㎡である。南西隅の柱穴は撹乱坑により削平されている。主軸方向はN－7°－Wである。柱穴は平面円形で、径は約20cm、深さは約15cm前後である。３、５、７号建物と切り合っているが先後関係は不明である。

８号建物出土遺物（第15図）

２～６は土師器である。２～５は坏で、２は口縁端部がやや外反しながら丸く収まる。角閃石・石英を含み、淡黄褐色を呈する。３は底径（復元）は8.0cmを測り、底部糸切りで外面は回転ナデ調整である。角閃石・石英・長石を含み、淡橙褐色を呈する。４は底径（復元）8.2cmを測り、底部は糸切りで板状圧痕が残る。角閃石・石英・長石を含み、黄橙褐色を呈する。５は底径（復元）8.4cmを測り、外面は回転ナデ調整である。６は土鍋である。角閃石・石英を含み、暗褐色を呈する。

９号建物跡（第17図）

梁間１間（1.60m）×桁行１間（2.20m）以上の建物で、調査区外へ展開すると思われる。桁方向の柱穴は南側へ傾斜しているため削平を受けている。主軸方向はN－9°－Wである。柱穴は平面円形で、径は約20cm、深さは約10cmである。出土遺物はなかった。



第18図　１号土坑実測図（1／30）

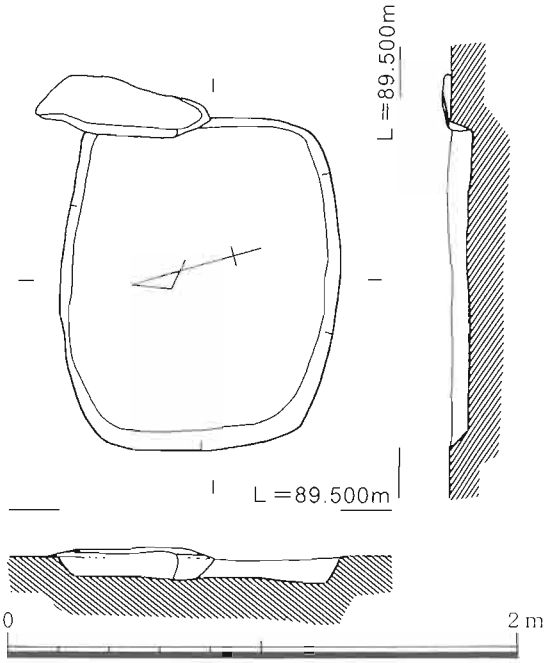
2．土坑

1号土坑（第18図）

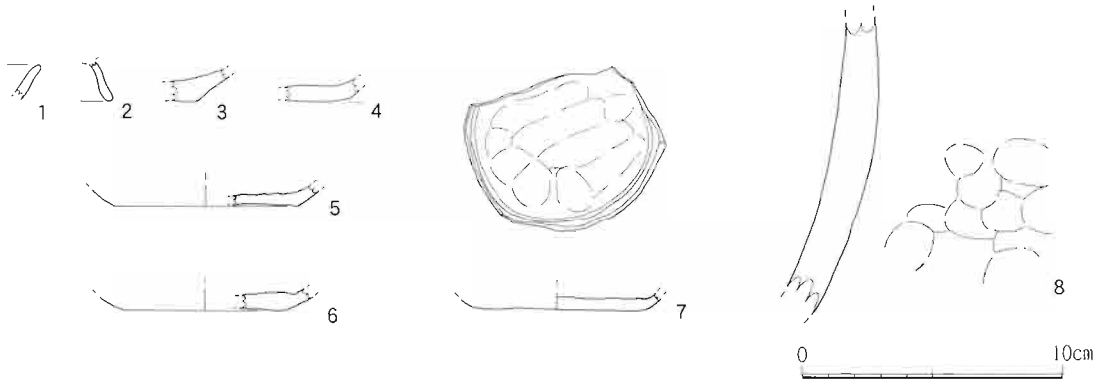
平面プランは長円形を呈し、東西方向に偏る。長軸390cm、短軸70cm、深さ16cmを測る。底面は東から西に緩やかに傾斜している。埋土は淡灰褐色である。遺物は土師器の小破片が出土しているが図化できない。

2号土坑（第19図）

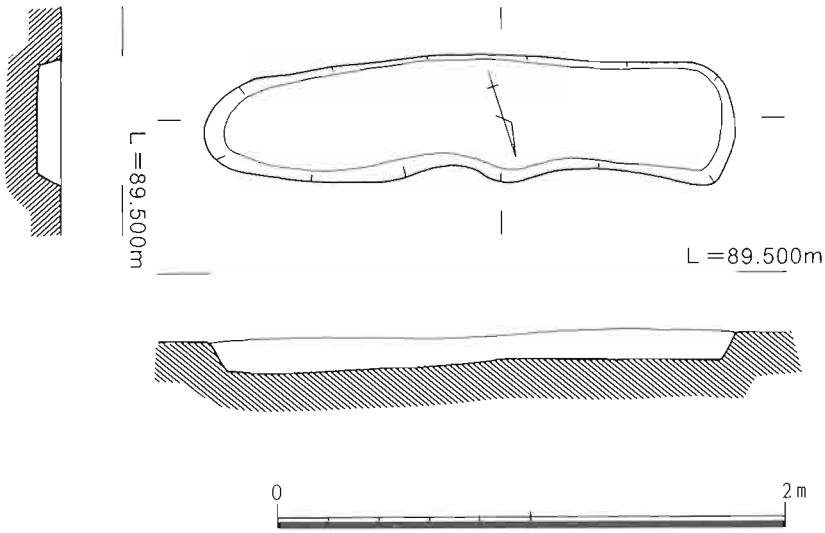
平面プランは方形を呈し、長軸130cm、短軸110cm、深さ10cmを測る。底面はほぼ平坦で、埋土は淡灰褐色である。遺物は土師器、白磁碗などの破片が出土している。



第19図　2号土坑実測図（1／30）



第20図　2号土坑出土遺物実測図（1／3）



第21図　3号土坑実測図（1／30）

２号土坑出土遺物（第20図）

１は白磁碗の口縁部である。２～８は土師器である。２は椀の高台である。端部は丸みをもちながら外反する。角閃石を含み、橙褐色を呈する。３～７は坏である。３は底部糸切りで、角閃石・石英を含み、橙褐色を呈する。４は底部糸切りで、板状圧痕が残る。角閃石・石英・長石を含み、橙褐色を呈する。５は底径（復元）7.3cmを測る。底部糸切りで、板状圧痕が残る。角閃石・石英を含み、橙褐色を呈する。６は底径（復元）6.0cmを測る。底部糸切りで、板状圧痕が残る。角閃石・石英・長石を含み、内面は淡橙褐色で外面は淡褐色を呈する。７は底径（復元）6.3cmを測る。調整は底部糸切りで、板状圧痕が残る。内面底部は同一方向への指ナデ痕が残る。８は甕の胴部で、胎土は砂、小石を多く含み粗い。外面は指オサエの痕跡が残る。遺構の時期は、出土遺物から12世紀頃と思われる。

３号土坑（第21図）

平面プランは長方形を呈し、略東西方向に偏る。長軸210cm、短軸50cm、深さ13cmを測る。底面は西側でわずかに高く、東側に傾斜している。埋土は淡灰褐色である。遺物は土師器の小破片が２点出土している。

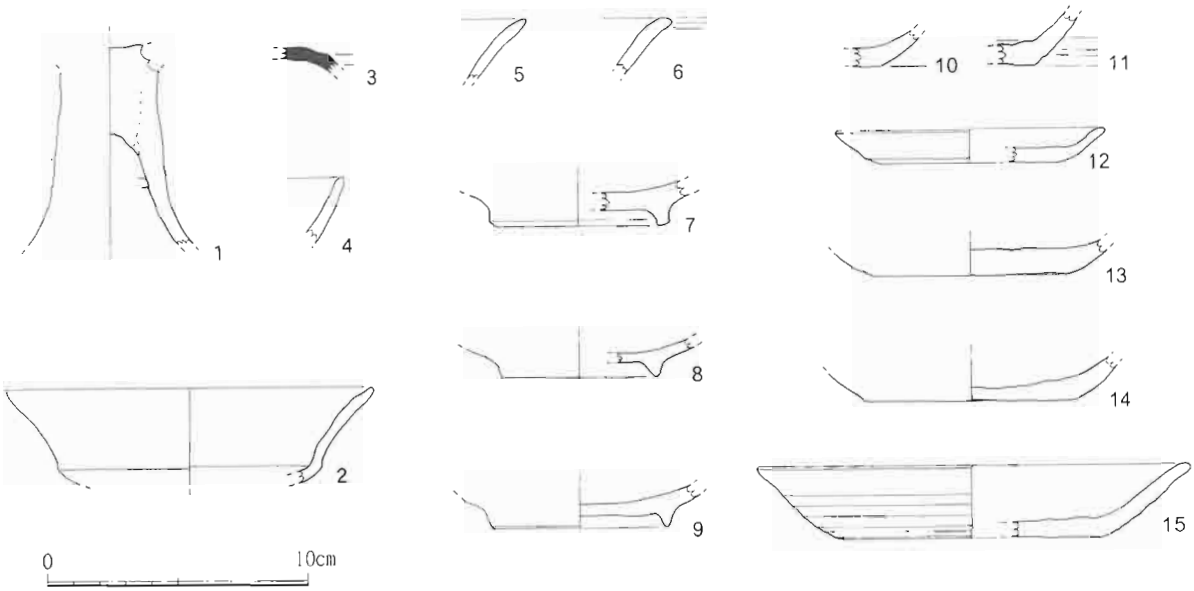
３．溝・溝状遺構（第３図）

１号溝は北側で検出され、溝状遺構と切り合っている。遺存長は23.5m、幅は平均で30cmを測り、深さは約５cm程度である。南側へゆるやかに傾斜しているが水が流れていた形跡は確認できない。また、調査区外へと延びる様相を呈している。溝状遺構は16条にわたって検出された。長さは約３～12m、幅は平均で50cm、深さは約５cmを測る。ほぼ東西方向に沿っており、約１m間隔で確認されている。どちらの遺構も建物群とは切り合いがなく、遺物が出土していないことから時期の特定はできない。

（３）その他の出土遺物（第22図）

ここでは前項で扱った柱穴出土以外のものや調査中に発見されたもので図化できるものを紹介する。１～３、５、６、10、11は遺構検出中、４、９、14は試掘調査により出土したもので、その他は柱穴内の遺物である。１は土師器高坏の脚部である。角閃石・石英・長石を含み、黄橙色を呈する。２は土師器の高坏で、脚部は欠損している。口径（復元）は14.0cmで、残存高は3.6cmを測る。口縁端部内面がわずかに内湾している。長石・金雲母を含み、橙褐色を呈する。３は須恵器の坏蓋である。外面に回転ヘラケズリの痕跡が残る。４は白磁碗である。口縁端部は肥厚する。５～15は土師器である。５～９は椀である。５は角閃石を含み、淡橙色を呈する。６は両黒土器である。７～９は内黒土器である。７は底部糸切りで、底径（復元）は6.6cmを測る。高台端部の内側に沈線が巡る。角閃石・石英・長石を含み、外面は黄褐色を呈する。８は底部糸切りで、板状圧痕が残る。底径（復元）は6.2cmを測る。石英を含み、外面は淡褐色を呈する。９は底部糸切りで、板状圧痕が残る。内底部にヘラミガキが残り、底径（復元）は6.8cmを測る。10、11、13～15は坏である。10は角閃石・石英・金雲母を含み、橙褐色を呈する。11は外面が回転ナデ調整で、内底部には渦状のナデが残る。角閃石を含み、淡橙褐色を呈する。12は皿である。口径（復元）は10.4cm、底径（復元）は6.8cm、高さ1.3cmを測る。底部は糸切りで、板状圧痕が残る。角閃石・石英・長石を含み、

黄橙色を呈する。13は底径（復元）7.6cmを測り、底部糸切りで板状圧痕が残る。角閃石・長石・金雲母を含み、淡褐色を呈する。14は底径（復元）8.2cmを測り、底部糸切りで板状圧痕が残る。角閃石・石英を含み、橙褐色を呈する。15は口径（復元）16.6cm、底径（復元）8.6cm、高さ2.8cmを測る。底部糸切りで板状圧痕が残り、外面は回転ナデ調整である。口縁端部がわずかに外反する。角閃石・石英・長石を含み、橙褐色を呈する。



第22図　その他の出土遺物実測図（1／3）

Ⅳ　まとめ

今回の調査区から検出された遺構は、掘立柱建物跡９棟、土坑３基、溝１条、溝状遺構16条、ピットなどである。掘立柱建物跡は、調査区南側に比較的まとまって確認された。建物の規模は、延床面積より大きく３つに分類することができる。まず、４、５、７号建物は約20㎡、１、８号建物は約23㎡を測り、２、３、６号建物は30㎡を越えるものである。４号と５号建物及び６号と８号建物は主軸方向を同じくするが、全体的にはまとまりがなくばらつきが目立つ。各々の時期は、出土遺物から２号建物が11世紀前半頃、６号建物は11世紀中頃～後半、３、４、７、８号建物は12世紀代に属する（８号建物は13世紀代に入る可能性がある）と考えられるが[注1][注2]、他の建物については出土した遺物から明確な時期を与えることができなかった。また、明確な建物跡が確認できなかった調査区北側についても、ピットが検出されていることから建物が存在していた可能性を考えることができる。これまで、市内における当該期の遺構は発見例が少ないが、荻鶴遺跡[注3]では11世紀頃の溝状遺構（溜池状）や水田遺構が発見されている。その他、後続するものとして森ノ元遺跡[注4]（12世紀後半から13世紀）の建物群や朝日宮ノ原遺跡、小迫辻原遺跡の墳墓群（12世紀から13世紀）などがある。

また、１号溝は溝状遺構を切っているが出土遺物はなく時期不明である。溝状遺構についてはほぼ等間隔に16条が検出されているが、これは畝状遺構としての可能性も考えられたが後世の削平を受けているため残りが悪く、調査区東側の土層でも詳細を確認することができなかったため溝状遺構として報告する。

このほか、遺構は確認されていないが古墳時代および中世期の遺物が出土している。土師器の高坏（第22図―１）は５世紀頃に属し、もう１点の土師器高坏および須恵器坏蓋（第22図―２、３）は６世紀末～７世紀前半頃のものである。この時期の生活遺構は周辺ではこれまで発見例がなく、平成５年度に行われた日田条里遺跡群[註5]（大分県教育委員会）の調査でも同時期の遺構、遺物は確認されていない。しかしながら、調査地点に近い台地崖面には東側で夕田横穴墓群（５世紀後半～７世紀後半）や西側で羽野横穴墓群（５世紀後半～８世紀）が確認されており、周辺には安定した集落が長期間にわたり存在していたことを示している。また、土師器の坏底部（第22図―11）は15世紀後半～16世紀前半頃に収まるものと考えられ、今回の調査区から花月川を挟んだ慈眼山の東側では同時期の遺構、遺物が慈眼山遺跡[註6]や慈眼山瀬戸口遺跡[註7]から確認されている。

今回の調査で検出された掘立柱建物跡は、日田大蔵氏[註8]が拠点としていた慈眼山の眼下に位置しているほか、周辺には中世期の地域社会を想定し得る字名[註9]などが残っていることからそれらを構成していた集落の可能性も考えられる。

（註１）佐藤　浩司「旧豊前国における古代末から中世前期の土器様相」『中近世土器の基礎研究Ⅶ』（1991日本中世土器研究会）

（註２）井澤　洋一『博多38』（1993福岡市教育委員会）

（註３）行時　志郎『荻鶴遺跡』（1995日田市教育委員会）

（註４）行時　志郎『森ノ元遺跡』（1998日田市教育委員会）

（註５）友岡　信彦ほか『日田条里遺跡群』（1998大分県教育委員会）
日田条里遺跡群の調査では、古墳時代前期の竪穴住居跡、土坑、溝状遺構等が検出されている。

（註６）田中　裕介『慈眼山遺跡（Ａ地区）』（1991大分県教育委員会）

（註７）坂本　嘉弘『慈眼山瀬戸口遺跡』（1992大分県教育委員会）

（註８）日田大蔵氏の文献史料による最初の記述は『宇佐宮御神領大鏡』による原野の開発によるものである。前史料では、1036年（長元９）に田島別符など市内５カ所を日下部為行が開発しようとした際に、刀祢大領大蔵氏が証人になったというものである。その後、1048年（永承３）に大領大蔵千員、1054年（天喜２）に大蔵朝臣永明の名が見えている。これらの記述からは、日田大蔵氏が11世紀の初めには日田郡で台頭した勢力であったことが理解できる。

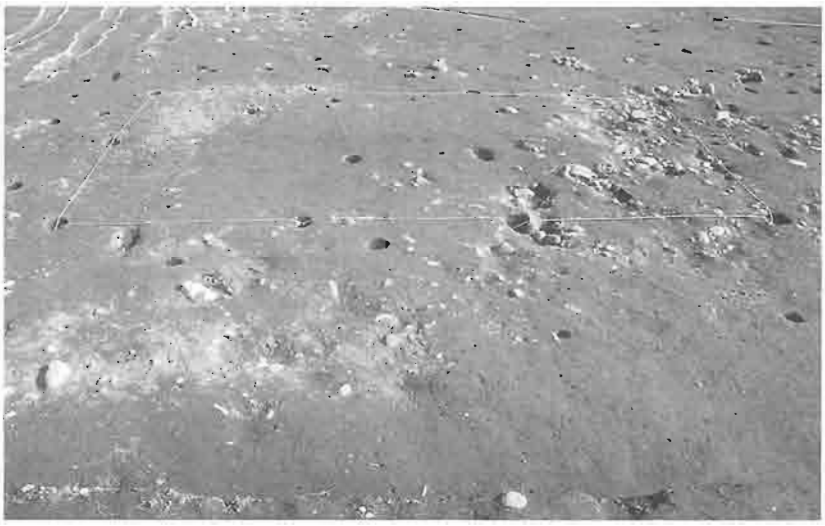
（註９）調査地点のある日田市上手町周辺（花月川右岸地域）には、中世期の地域社会における中心的位置を想起させる当根町・郡町・郷寺畑などの地名が存在する。

調査地点全景写真

調査地点周辺の航空写真
（北から）

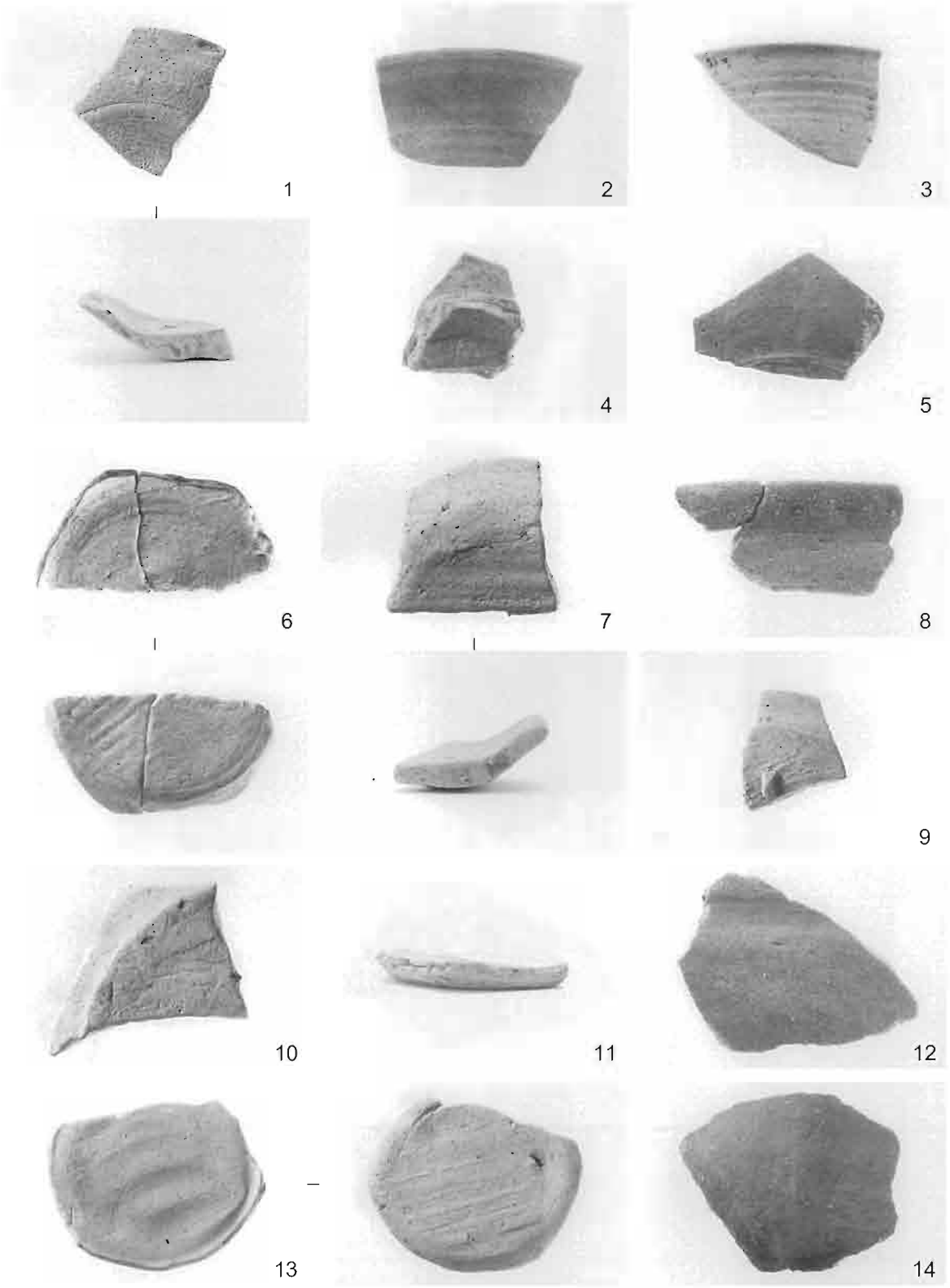
図版２

１号掘立柱建物跡



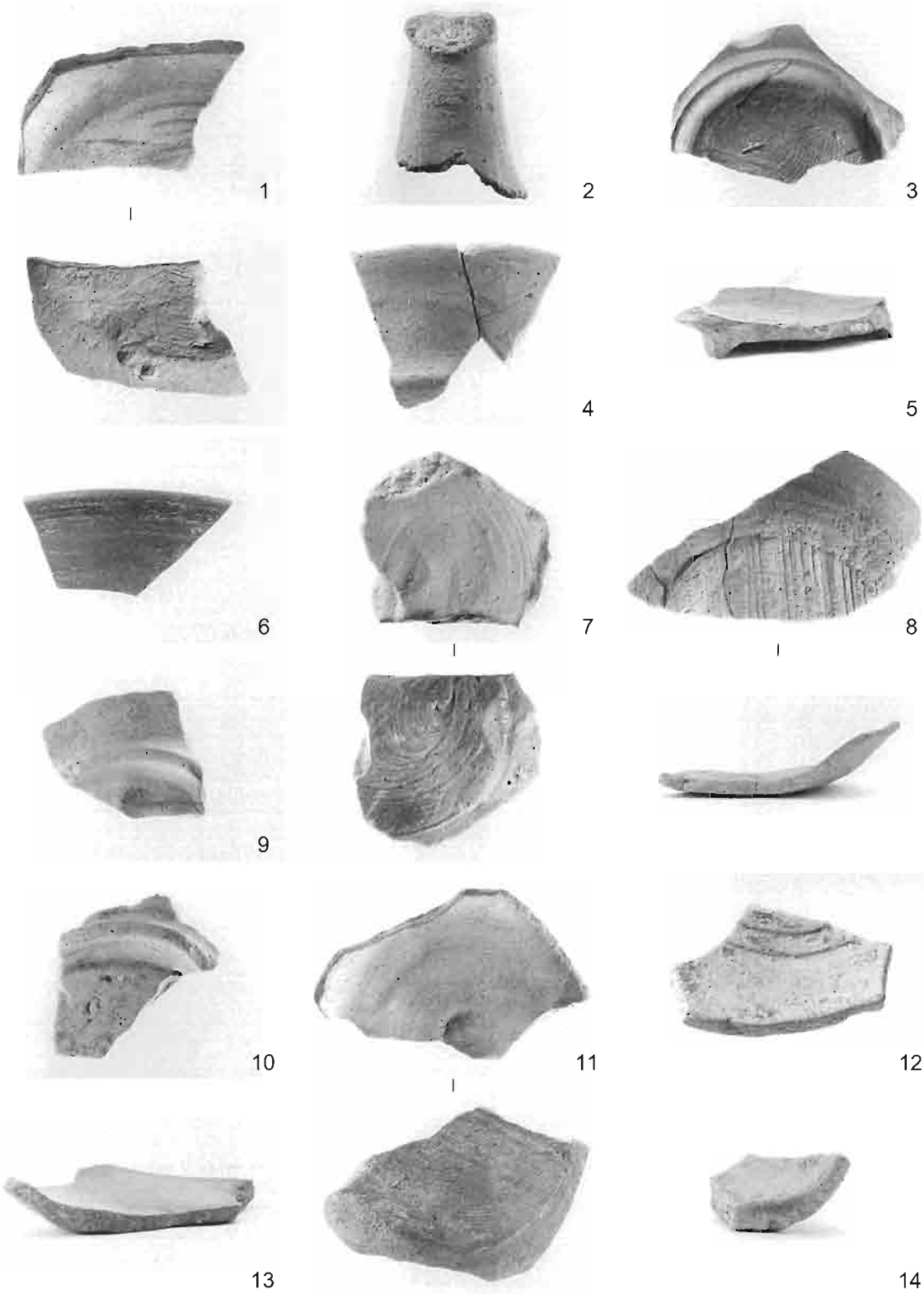
２号掘立柱建物跡

２号土坑遺物出土状況



1	3 号掘立柱建物	2、4	4 号掘立柱建物
3、5、7－9	6 号掘立柱建物	6、10－12	8 号掘立柱建物
13、14	2 号土坑出土遺物		

図版４



1　　２号土坑出土遺物
2－14　その他の出土遺物

報　告　書　抄　録

フリガナ	ヒタジョウリノボテチク
書名	日田条里上手地区
副書名	
巻次	
シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第21集
編著者名	吉田博嗣
編集機関	日田市教育委員会
所在地	〒877－8601　大分県日田市田島２丁目６－１
発行年月日	2000年３月31日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ヒタジョウリ 日田条里 ノボテチク 上手地区	オオイタケン ヒタシ 大分県日田市 オオアザニシアリタアザノボテ 大字西有田字上手					19971006 ～19971130	1,350㎡	宅地造成

所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
日田条里 上手地区	集落跡	古墳～古代・中世	掘立柱建物跡 土坑 溝 溝状遺構	須恵器 土師器 黒色土器 輸入陶磁器	

日田条里上手地区

日田市埋蔵文化財調査報告書第21集

編　集：日田市教育委員会
発　行：〒877－8601
　　日田市田島２丁目６－１
発行年：平成１２年３月３１日
印　刷：有限会社　朝日堂印刷